

今日の「楽しい」を見守って

瀧田節子

(大学教員)

還暦とは、六十年で干支が一回りして再び生まれた年の干支に還り、元の暦に戻ることをいいますが、初孫のK（女兒）とは、六十歳の年の差で同じ干支。そして二歳下に妹Nが誕生。それから八年を経て、姉妹は小学二年生と一年生。

この原稿の締め切り後の十二月には赤ちゃんが家族に加わり、二〇一六年の春は六人家族。おばあちゃんの私は、三人の孫たちの何気ない日常を思い返ししながら、感じたことを四回にわたりお伝えしたいと思います。

春は砂で温泉？

四月半ばの暖かい日のこと、間もなく二歳になる孫Kと、家の近くの公園の砂場で遊びました。下の孫（妹）Nが生まれたばかりだったので、Kの外遊びは、ばあばのお役目。

砂場に入ると、Kはまるで砂の温泉にいるように体中を砂に預け、両手に砂を握っては開くことを繰り返し、指からはらはらとこぼれる砂の行方を飽きずに眺めたのでした。さらさらの砂がよほど気持ち良かったのか、顔見知りの一歳五か月のお友達と、砂まみれで

瀧田節子（たきたせつこ）

専門：造形表現教育。東京都の図画工作専科教諭を長く務める。筑波大学附属小学校教諭、お茶の水女子大学附属小学校講師を経て、現在は東洋大学、関東学院大学、清和大学短期大学部で非常勤講師を務めている。

たつぷり遊びました。

昼近くなり、イチゴでもトマトでも帰ると言わず、「クッキー食べよう」と言うのと、やつと帰る気に。帰り道はタンポポの種を飛ばしたり、葉っぱを食べたり、たつぷり一時間。帰ったらすぐにお風呂で、大満足の一日。

孫の遊ぶ様子を見ながら思い出すのは、娘の幼い頃の姿。砂をつかんで天に差し出し、拳を見つめるしぐさがそのまま重なります。

孫の遊びと向き合い、幼い命を見守る幸せを感じながら、自分の生が二倍にも三倍にもなるかのように思います。そういえば、このような砂をいじる「感覚遊び」について、小児科医北嶋道之氏は、「(自



然の中の)『地水火風』が幼児にとつての何よりのテーマであるべきだ。」「砂」は形相(有事即応力)」と著書『新しい母の本』(朝日新聞社)で述べていたことを思い出し、読み返しました。

一歳のガラス絵のこと

幼児と絵の具の出会いです。^注

二〇〇八年、お茶の水女子大学附属いずみナーサリーで、大きな窓ガラスへのペインティング活動を参観したことから、早速ナーサリーで教えてもらったスポンジタンポ(スポンジをストッキングで包んで、フィルムケースに差し込んだもの)を作り、何でもやりたがる時期となったKと、自宅のベランダのガラス戸で遊びました。

それは九月のある日のこと。ばあばをまねて、始めは恐る恐る手を伸ばしたKでしたが、

一度「ボン」と色をガラスに付けるや、すぐにキヤーキヤーと声を上げ、体を揺すって喜び、熱中したのでした。色を「ボン」とガラスに付けてはそのガラスをじっと眺め、また腕を伸ばし、色を付けることを繰り返す一歳四か月児の様子に、何を考えているのかな？と思ったものです。

十一月、一歳六か月になったKは、ガラス絵遊びをしているうちに、筆拭きタオルに絵の具の色が付いていくことに興味を持ち、タオルがキャンバスになった、絵の具を染み込ませる遊びを熱心に始めました。タオルを折り替え、裏面に染み出る色も確かめながら、ボンボンと筆を押し付けて遊びました。

この日、Kは、ママと絵の具で遊び始めました。黄色の絵筆に赤色が混じって付いた筆を、そばにいたママはタオルで拭きました。この後Kはママをまねて絵筆をタオルで拭き、白いタオルに付いた色を新たな気持ちで見た

のだと思います。新しい表現の方法を見つけたKは、ママがばあばと交代してキッチンに行った後も、満足するまで描き遊びました。やがて、Kはタオルに目を落

としたまま立ち上がり、タオルを食卓に広げて眺めた後、タオルを手にとると、キッチンのママに見せにきました。大好きなママと一緒にうれしい気持ちを味わいたかったのでしよう。

この出来事から、一歳児は自身の中にすでに、表現・発見・鑑賞・共有のサイクルを持っているのかもしれない、と心に刻みました。その後、ガラス絵は姉妹の夏のお楽しみになり、幼稚園のお友達も加わって、お絵描き遊びを楽しんでいます。



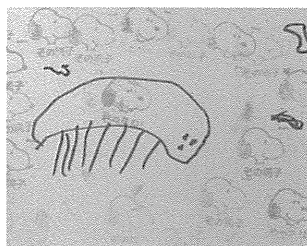
▲二人で遊ぶガラス絵 (K 4歳、N 2歳)

「ばあば、おみやげよー」

小さい頃から、小学生になった今も、孫たちは毎日のように、道端や家の周りで、ネコジャラシやタンポポ、木の葉や小石や小枝を拾い、意気揚々と家に帰ってきます。そして、大きな声で「ばあば、おみやげよー」。集めることが面白いのでしょね。多くは玄関に放置されたままになるので、わが家には枯れ葉や手頃な枝木がゴロゴロ。性差の研究者、皆本二三江先生は、このような幼児期の女の子たちの採集遊びについて、「彼女たちの祖先の生活を追体験しているのではないかと思う」と著書『絵が語る男女の性差』（東京書籍）で述べ、女の子が描く花や木や果実などをモチーフにした楽園の絵と関連しているのではないかといえます。そういえばわが家のKもNも、花や草木を夢中になって描きます。

それから、小さい生き物も、よく描きますね。Kが、毎日のようにかがみ込んで見続けた「ありさん」を、緑色クレヨンで初めて描いたのは二歳半の頃。妹のNが二歳半になって鉛筆で描いたのは、大好きな「ダンゴムシ」。一年生になっても夏になると飼育かごで大事に育てています。

——続く——



▲「ダンゴムシ」(N 2歳5か月)



▲「ありさん」(K 2歳5か月)

注 瀧田節子「一〜二歳児のガラス絵から、からだを喜ばせて表す子どもの姿に学ぶ」『幼児の教育』第一〇八巻第十二号 P 58〜63に詳しく掲載。